

韓国における文化財用語醇化に関する断想

—「^{ジル グ ルツ}질그릇」の迷走を通じて—

扈 素妍・奈良文化財研究所

What Happened to 'Jill-gurut'? The Cultural Heritage Terminology Purification Movement in Korea

Ho Soyeon・Nara National Research Institute for Cultural Properties

韓国語／Korean 文化財用語／Cultural heritage terminology

ハングル醇化事業／Korean language purification movement

考古学用語／Archaeological terminologie 陶磁器用語／Ceramic terminologie

※本文における韓国語原文の用語集や新聞記事などは、筆者が適宜現代日本語で訳したものである。

はじめに

20代の初め頃、一度、歯ブラシだと思って一ヶ月程使っていたものが、実はちいさな靴磨き用のブラシであることに気づいた経験があった。当時、家に遊びにきた友達に指摘されなければ、そのまま二ヶ月くらいは使い続けただろう。使用する時に違和感や硬すぎるといった感覚はあったが、そもそもそういうものだなと思ひこんでいた。これはちょっと極端な例ではあるが、誰もが一度ぐらいいかなという経験をするところがあるだろう。言葉においても、このようなことはしょっちゅう起こる。特に、翻訳や通訳をしていると、自分がネイティブとして完璧に理解していると考えていた言葉が、実は初見した外国語より知らなかったことを悟ることが相次ぐ。

「^{ジル グ ルツ}질그릇」もそうであった。今年の上半期に多言語チームでは、文化財の多言語化において「土器」と「陶器」の定義が各国でブレがあると話題になったことがある。各国の文化や歴史が異なることを考えれば、定義のブレがあることは不思議ではないだろう。しかし、この場合、そのブレが文化財を多言語化する際のネックになる。説明を付け加えることができる付箋や説明文などはともかく、遺物名のみが表記されている付箋を多言語化する際にはどうすればいいのか。これが、多言語チームが直面した課題であった。その際、私は韓国語担当として、短い時間で調査が足りなかったことはあるものの、現在韓国の定義や用例を調べて、次のような図と文章にまとめ、6月の室長会議資料や部員会議資料として提出した。

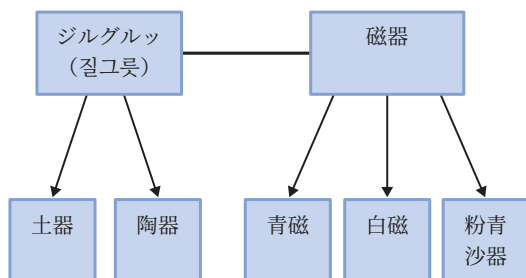


図1 日本語で翻訳した유홍준の<図2>

→ところが、韓国文化財庁は「韓国では日本の翻訳物に従い、土器・陶器・炆器・磁器と区分する」としている（『陶磁器保存・管理案内書』2014年）。考古学や美術史学によって定義のズレがある。ジルグルッ（질그릇）を土器という意味で使う例も散見。

▶韓国内部での用例や定義にばらつきがある。

この資料の図は、主に「陶磁器分野分類体系及び基本用語の翻訳に関する考察」という論文（박현주, 2019）に載った俞弘濬^[1]氏の<図2>を翻訳して、作成したものであった。部員会議においては、これに基づいて報告した。ところが、会議後、国際遺跡研究室の研究員から、次のような質問を受けた。

ジルグルッ

질그릇は北朝鮮の考古学で使用する用語で、韓国の考古学では使ってないと知っていますが、どうですか？

これは想定外の質問であった。考えてみれば、多言語業務に就く以前から私は考古学や歴史学における北朝鮮の影響をほとんど意識したことがなかったことに気づいた。また、確認したところ、実際に北朝鮮では考古学の専門用語として論

[1] 韓国で著名な美術史学者で、『私の文化遺産踏査記』という著書が1990年代大ヒットし、『私の文化遺産踏査記』1・2・3は2000年には200万部以上の売り上げであった。現在まで、『私の文化遺産踏査記』のシリーズは18巻に至っている状態である。ソウル大学校の美学科出身で、成均館大学校で哲学博士号を取得した。『私の文化遺産踏査記』を出版した時は、嶺南大学校の教授で、2002年に明知大学校の教授になり、2006年には文化財庁長に任命された。現在は、韓国学中央研究院の理事長である。「80년대 미술운동 돌아보는 전국 순회전」『연합뉴스』1991.11.27; 「책마을 이야기」『베스트셀러, 출판사 얼굴은 아니다』『東亜日報』2000.5.5; 「명지대, 유홍준 교수 영입」『韓國經濟』2002.1.14; 「<프로필> 유홍준 문화재청장」『연합뉴스』2004.9.1; 「한국학 중앙연구원 이사장에 유홍준 석좌교수 선임」『해럴드경제』2021.6.30。

文や報告書などにも使用されていた^[2]。そのような事実を知らなかった自身が恥ずかしかった。同時に「ならばなぜあのような図が韓国の論文に載っているのか」「韓国における文化財用語として^{ジルグルッ}질그릇は用例があるのか」「そもそも^{ジルグルッ}질그릇とは何を示すのか」などの疑問が生じた。本稿は、このような疑問に答えようとする試みである。そのため、辞典類や用語集の定義と解説を探り、また、新聞記事を取り上げて、用例や当時の雰囲気を検討する。

1. 「^{ジルグルッ}질그릇」とは

まずは、「^{ジルグルッ}질그릇」の辞典的な意味を探ってみる。^{ジルグルッ}질그릇は韓国の国立国語院が提供する『標準国語大辞典』には「釉を塗っていない、泥土のみを焼いて作った器。表面につやがない。」^[3]と定義されている。すなわち、土で作った器、土器という意味を含んでいる。ならば、「土器」の場合はどうだろうか。同じ『標準国語大辞典』から確認したところ、「土器」には二つの定義があって、一つ目は「歴史」の専門分野の用語と分類^[4]されていて、「原始時代に使われた、土で作った器。模様、文様などで民族や時代の特色を表す」となっている^[5]。二つ目は「工芸」に分類されていて「泥土で作って釉を塗らずに焼いた器」となっている。ここから、土器の場合は、「歴史」と「工芸」という分野に分けて定義されていて、歴史分野では時代や民族の特徴を帯びたものとして提示されていることが分かる。

一方、「^{ジルグルッ}질그릇」と「土器」のより専門的な定義は『韓国民族文化大百科事典』から確認できる。ここで「^{ジルグルッ}질그릇」は、「陶土、つまり泥を材料にして土焼き窯で焼いた容器」と定義し、その内容について次のように説明している。

一般的に陶器をいう。^{ジルグルッ}질그릇として「陶器」は現在、土器と陶器に分かれて使用されている。土器という名称が20世紀に入って使われる用語であるのに

[2] 사회과학원 고고학연구소편 『조선 고고학개요』 (세날, 1989) ; 한창균 『북한 고고학 미술사 용어집』 (백산자료집, 1996)。

[3] 『표준국어대사전』 「질그릇」 (https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?word_no=484479&searchKeywordTo=3, 2021.11.22閲覧)。

[4] 『標準国語大辞典』の凡例の「01 表題語の範疇と専門領域表示」によると「専門語と固有名詞には該当専門領域を表示した」と提示されている。『표준국어대사전』 「일러두기」 (https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?word_no=266066&searchKeywordTo=3, 2021.11.23閲覧)。

[5] 『표준국어대사전』 「토기」 (https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?word_no=496515&searchKeywordTo=3, 2021.11.22閲覧)。

対し、三国時代から今日に至るまで広く使われた言葉は陶器であった。陶器には弱い軟質陶器と硬い硬質の硬質陶器があり、釉薬を塗った施釉陶器や釉薬を塗らない無釉陶器がある^[6]。

このように、『韓国民族文化大百科事典』によると、^{ジルグ}「^{ルッ}」は「陶器」であり、その理由は、「土器」という名称は20世紀に入って使われる用語であるが、「陶器」こそ、三国時代から使用され続けて来た言葉であるためだとされている。ここで、一つ、注意しておきたいのは、「^{ジルグ}」が『韓国民族文化大百科事典』には「工芸」の「概念用語」として提示されている点である。

また、『韓国民族文化大百科事典』で「土器」^[7]は「先史文化」の「概念用語」として掲載され、「粘土を練って500℃以上の高温で焼成した容器」と定義されている。また、その内容において、まず、「今から1万2千年前に発明された土器は世界各地で使用された人類の最も普遍的な生活容器の一つとして人類文化の発展に大きく寄与した」と土器の意義を説明した後、「土器」と「陶器」という項目を設けて「瓦質土器」と「陶質土器」について述べている。「瓦質土器」は窯の底が水平をなして、その温度が850～950℃までになり、その温度で焼成したもので、その温度では胎土に含まれている酸化アルミニウムや珪酸などが溶融することができないため、土器表面に被膜が形成されないと説明している。一方、「陶質土器」については、韓国の三国時代と日本の古墳時代には、窯の温度を1000℃以上にする事ができるトンネル式窯が登場して、胎土の中の酸化アルミニウムと珪酸が堅固な結晶にかわり、その体積が減ることによって「陶質土器」が生産されたと説明している。すなわち、ここでは実際に三国時代に「土器」という言葉が使われたのかの問題ではなく、どのような環境と技法によって制作されたのかを中心に「土器」という言葉の内容を説明している。

以上の定義を総合すると、「^{ジルグ}」は土で作った「陶器」であって、「土器」は韓国の歴史においては近代まで使用されてない言葉であった。しかし、「土器」は「粘土を練って500℃以上の高温で焼成した容器」であり、「人類の最も普遍的な生活容器の一つ」で、韓半島には「瓦質土器」と「陶質土器」が存在したことになる。このように、同じ事典の中でも、「^{ジルグ}」、「土器」、「陶器」の定義が揺

[6] 『한국민족문화대백과사전』 「질그릇」 (<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/SearchNavi?keyword=%ED%86%A0%EA%B8%B0&ridx=1&tot=766>, 2021.11.25閲覧)

[7] 『한국민족문화대백과사전』 「토기」 (<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/SearchNavi?keyword=%ED%86%A0%EA%B8%B0&ridx=1&tot=528>, 2021.11.25閲覧)

れていることがうかがえる。もちろん、各分野において使う用語には、おなじ言葉であっても定義が違うことは珍しくない。しかし、このように、一方では相手を全面否定しているのに、向こうではそのような反応を全く無視しているような状態は中々珍しいと考えられる。ここからも見て取れるように、「^{ジルグルッ}질그릇」、「土器」、「陶器」の定義は専門分野によってずれがあり、分野によっては専門用語として認められていないような、もやもやする食い違いがある。ここで生じうる質問は次であろう。なぜこのような状況に至ったのか。

2. 植民地期の「^{ジルグルッ}질그릇」

「^{ジルグルッ}질그릇」という用語の根はどのようなものであったのか。どのように認識されて、使用されてきたのか。なぜ、近年、文化財用語として浮上したのかについて考察する第一歩として、植民地朝鮮では「^{ジルグルッ}질그릇」がどのような意味で使われていたのかを検討する必要がある。そのため、ここにおいては、1920年に創刊されて強制的に廃刊になった1940年まで、植民地期の代表的な朝鮮語新聞であった『朝鮮日報』^[8]と『東亜日報』^[9]の記事を通じて近代における「^{ジルグルッ}질그릇」の使用例を分析する。

1920年から1940年まで、「^{ジルグルッ}질그릇」という言葉が使用された記事は『朝鮮日報』と『東亜日報』を合わせて138件確認できる^[10]。その中で、132件は「^{ジルグルッ}질그릇」をハングルのみで表記して、その定義などは述べられていなく、記事の脈絡からみれば一般に使われる器という意味で使用されていたと考えられるものが多い。ところが、1921年9月17日の『朝鮮日報』には「有望な陶器業」という題目の新聞記事が掲載される。その内容は朝鮮社会で工業が発達していないのは、朝鮮王朝

[8] 一九二〇年三月五日に朝鮮貴族及び大地主などを軸としていた大正親睦会によって組合組織として創刊。パク・ヨンギュによると、これまで民族主義左派の論調を振るった新聞だと評価されてきたが、実際に民族主義左派が結集したのは一九二七年からであり、『東亜日報』と比較して論調は一貫していなかった。박용규 『식민지시기 언론과 언론인』(소명출판, 2015)、五九～一一頁・二八五～二八七頁。

[9] 一九二〇年四月一日に創刊。創刊時から民族主義を標榜し、全体的論調は民族改良主義であった。同上、五九～一一頁。

[10] Naver News Library で「^{ジルグルッ}질그릇」を検索した結果の画面。(https://newslibrary.naver.com/search/searchByKeyword.naver#%7B%22mode%22%3A1%2C%22sort%22%3A0%2C%22trans%22%3A1%2C%22pageSize%22%3A10%2C%22keyword%22%3A%22EC%A7%88%E A%B7%B8%EB%A6%87%22%2C%22status%22%3A%22success%22%2C%22startIndex%22%3A1%2C%22page%22%3A1%2C%22startDate%22%3A%221920-03-05%22%2C%22endDate%22%3A%221999-12-31%22%7D, 2021.11.11 閲覧)。

期からであり、そのため磁器や陶器も徐々に減少しているが、「陶器（ジルグルッ）」^[11]は朝鮮内で需要があることを論じるものである。ところが、この記事では、「高麗時代磁器（陶器）」「陶器（陶器）」という表記も並列になっているため、記者が土で作った器を全て「陶器」と認識したことが読み取れる。このように「陶器」と「ジルグルッ」を（）に入れて並列している例や「ジルグルッ」を「陶器」と同じものをしめす言葉として使用した例は、この他にも1930年代まで散見できる^[12]。しかし、「ジルグルッ（磁器）」と表記した例^[13]もあり、この時期には統一されていないことがうかがえる。

一方、「土器」の場合、「産業發達の由来（続）」^[14]「原始時代の芸術（六）」^[15]「近世朝鮮商工業の發達史（四）」^[16]「新發掘した古物問題で慶州市民の奮起」^[17]「多数發掘された樂浪古跡、今後五日調査完了」^[18]など^[19]、歴史や考古学における専門用語として、その分野に関わる記事に使用されたことが確認できる。

そうであるならば、「^{ジルグルッ}질그릇」に「土器」まで含めての言葉という認識はどこからきたのか。その手掛かりになるのが、1936年12月17日の『朝鮮日報』に連載された「朝鮮語標準語集」という記事である。この連載記事は1936年11月1日から同年12月27日まで45回にわたって、朝鮮語の標準語を（同義語）（近似語）（略語）にわけて、その言葉を羅列して、正しい標準語の様子を提示する内容になっている。この「朝鮮語標準語集」は「朝鮮語標準語査定委員会」によって作成されたものである。

「朝鮮語標準語査定委員会」とは、1933年に『朝鮮語綴字法 統一案』を刊行し

[11] 「도기(질그릇)」と表記されている。「有望한陶器業」『朝鮮日報』1921.9.17。

[12] 「日本全國에 遍滿한 = 巨額의 偽造銀貨」『東亜日報』1925.1.26；「消夏諷刺漫筆（8）」『東亜日報』1929.6.25；「陶器製造場보고 朝鮮의 歷史的 器物인」 질그릇 製造村踏査코」『東亜日報』1931.8.1；「保險金請求訴」『朝鮮日報』1936.8.31。

[13] 「生活難과 愛子情에 ぞ들리는 一朵花」『東亜日報』1929.5.29。

[14] 「産業發達の由来(續)」『朝鮮日報』1920.8.9。

[15] 「原始時代の 藝術(六)」『東亜日報』1920.5.18。

[16] 「近世朝鮮商工業의 發達史(四)」『東亜日報』1921.4.23。

[17] 「新發掘한古物問題로 慶州市民의 奮起」『東亜日報』1921.10.22。

[18] 「多数發掘된 樂浪古跡 今後五日調査完了」『東亜日報』1924.11.11。

[19] 「新羅古蹟案内」『東亜日報』1924.1.02；「數百餘點의 塚藏古器發掘」『朝鮮日報』1926.6.2；「古朝鮮・古文化」『朝鮮日報』1926.6.28；「古金鼎發掘」『東亜日報』1928.6.8；「古蹟巡訪(1) 燦爛한 新羅文化」『朝鮮日報』1928.11.17；「高麗時遺物 面鏡과土器 최승대서 발간」『東亜日報』1929.8.19；「漢高祖의 名臣韓信의 古墳發見」『朝鮮日報』1933.12.22；「續續發見되는 高句麗文化의 精華」『朝鮮日報』1933.5.12など。

た朝鮮語学会^[20]の主催で結成された委員会であり、1935年1月1日の午後5時から温陽温泉の霊泉医院という所で第一読会を開催^[21]した。6日まで続いたその会議において彼らは、朝鮮語の標準語を「交通・政治・文化の中心地である京城語」から、また、「通俗的でまた、中流階級以上の言語」から選定するため、討議及び査定することを決定し、査定語彙4500余語を審議・査定した^[22]。ところが、第一読会では査定できなかった残りの語彙を査定し、また、すでに審議された査定語彙を修正する委員を設けて、同年3月に「第二読会」を開催し、再び査定することを決定した^[23]。ところが、「第二読会」は3月ではなく、同年8月4日から9日まで京城の牛耳洞において開催された。ここでは第一読会に参加した30名の委員に、40名の委員を加えて総70名の委員が第一読会で決定された査定語彙を補充及び修正した4000余語と「ハングル文法統一案」の附録の「標準語」までを合わせて審議した^[24]。この「第二読会」では、標準語査定の意義について、臨時議長の李熙昇が『朝鮮語辞典』を編纂するための前提事業になる重大な作業であると述べたという^[25]。

「朝鮮語標準語査定委員会」の最終査定会は翌年の7月31日に仁川府牛角里の仁川公立普通学校で開かれた^[26]。この「第三読会」では原案の5669ヶ語を審議し、そのうち、3001個を標準語として決定し、それに対して修正委員が修正を終えると共に発表することまで確定した^[27]。そして、同年11月1日、ハングル記念490

[20] 民族主義国語学を提唱し、大韓帝国時代から韓国語の整備を率いた人物である周時經の学派を継いだ団体。その前身は周時經の弟子である張志暎・申明均・李秉岐などが1921年12月創立した朝鮮語研究会である。この朝鮮語研究会は1920年代を通して朝鮮語講習会を開き、1924年にはハングル日を制定、1929年には朝鮮語辞典編纂会を創立するなど、植民地期において朝鮮語研究と普及を図った団体であった。1931年には名前を「朝鮮語学会」に改めて、国語啓蒙運動を行い、1933年には『朝鮮語綴字法統一案』を、1936年には「標準語査定案」を、1940年には『外来語表記法』を発表した。최경봉「쟁점: 일제강점기 조선어학회 활동의 역사적 의미—『해방 전후사의 재인식』에 나타난 인식 태도를 비판하며—」『민족문화사연구』(민족문화사학회・민족문화사연구소, 2006); 김석득「근・현대의 국어(학) 정신사—국어연구학회에서 조선어학회 수난까지, 그 역사적 의미—」『한글』272(한글학회, 2006)。

[21] 「우리말을精選할 標準語査定委員會」『朝鮮日報』1935.1.4。

[22] 「通俗的京語를 選擇 우리말標準語査定」『東亞日報』1935.1.5。

[23] 「修正委員에 一任 今春中에再審査」『朝鮮日報』1935.1.8。

[24] 「標準語査定 二讀會終了」『東亞日報』1935.8.11; 「標準語査定 二讀會閉幕」『朝鮮日報』1935.8.11; 「標準語査定 着着審議進行」『朝鮮日報』1935.8.7。

[25] 「標準語査定 着着審議進行」『朝鮮日報』1935.8.7。

[26] 記事によると、その間数十回の修正委員会が開催されたが、大会としてはこれが最後になるという。「朝鮮語標準語 最終査定會」『東亞日報』1936.7.29。

[27] 「標準語査定 第三讀會終幕」『朝鮮日報』1936.8.3。

周年を迎えるハングルの日に『朝鮮日報』において、この成果が「標準語」として発表される^[28]。上記の連載記事はこのような脈絡の中で、「標準語」の用例を紹介する場として設定されたのである。

ここで、「^{ジル グルッ}질그릇」は「土器（無潤）」の「近似語」として提示されている^[29]。一方、同記事で「陶器（有潤）」の「近似語」として提示されている朝鮮語標準語は「^{オ ジ グルッ}오지그릇」である。『韓国民族文化大百科事典』によると、「^{オ ジ グルッ}오지그릇」とは「赤い泥土で作って日で乾かした後、上薬を塗って焼いた器」を意味する^[30]。つまり、この「朝鮮語標準語集」では「上薬」による「潤」の有無が土器と陶器を分ける基準になっていることが分かる。そして、この記事から、「朝鮮語標準語査定委員会」は「土器」と「陶器」いう漢字語をハングル言葉の中に位置づけようとしたことが読み取れる。しかし、前述した通りに植民地期では、「^{ジル グルッ}질그릇」は日常に使われる土で作った器という意味で使用され、主に先史・古代の遺物を示す「土器」とは距離があったと考えられる。その上、この標準語制定は、朝鮮語学会の朝鮮語辞典編纂事業の基盤になるものであった。ところが、植民地朝鮮における日本語普及の拡大を図っていた総督府は「標準語査定案」が10月28日に公式に発表されると、朝鮮語学会の大衆集會を禁止し、国語〔日本語―筆者註〕常用化政策をより強圧的に行い、標準語を普及する機会を与えなかった^[31]。そのため、この標準語査定の事業によって「^{ジル グルッ}질그릇」が「土器（無潤）」の「近似語」であるという認識は、植民地期の朝鮮社会に普及されたとは考えにくい。ところが、この事業が、すでに存在している朝鮮語の言葉を「標準語」として査定したものであることを考えれば、朝鮮人たち、特に京城の識字層朝鮮人たちには「潤のない土で作った器」は朝鮮語で「^{ジル グルッ}질그릇」であり、「土器」と近い言葉という認識を共有していたため、このように査定されただろう。

[28] この記事によると朝鮮語の標準語を作成した理由は、「朝鮮語辞典編纂の一基礎工作」として「朝鮮語綴字法統一案」と「朝鮮語標準語」事業を合わせ6ヶ月の時間をかけて完成したという。また、標準語査定委員は「各文化事業機関に従事し、また、言語方面に興味をもっている人」で、「京城や近畿で生長した人」が全委員数の過半になるように選定したと述べられている。李克魯「ハングル記念四百九十周年 標準語発表に際して」『朝鮮日報』1936.11.1。

[29] 「조선어표준말모음 (37) 돌재, 비숫한말 (近似語)」『朝鮮日報』1936.12.17。

[30] 『한국민족문화대백과』「오지그릇」(<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/SearchNavi?keyword=%EC%98%A4%EC%A7%B8%EA%B7%B8%EB%A6%87&ridx=0&tot=3>, 2021.11.11閲覧)。

[31] 総督府は朝鮮を植民地にして以来、一貫して国語、すなわち、日本語の常用化政策を推進した。しかし、急進的な推進よりは、二個言語併用政策を採択していたが、それは学校においては朝鮮語科目の授業を許し、日本人役人及び警察などに対しては朝鮮語の取得を奨励する政策であった。しかし、朝鮮語科目の授業を許したとしても、朝鮮語科目を除いた科目は全て日本語で行われたため、朝鮮人学生の学力低下は避けられず、学生たちの抵抗が続いた。최경봉前掲論文、421・425-426頁。

以上のように、植民地時代には「^{ジルグルッ}질그릇」は「陶器」と、また、「土器」とも結びついて使われた用例はあるものの、全体使用例をみれば歴史学や考古学の専門用語ではなく、一般的に土で使った素朴な器という意味で使われたと考える。ところが、1936年には「朝鮮語標準語査定委員会」によって、「土器（無潤）」の「近似語」として提示されるが、これもまた、専門用語として使用することを提議したわけではなく、むしろ「標準語」を確定することが重要であった。すなわち、植民地時代には、そもそも「^{ジルグルッ}질그릇」は専門用語として定義や用例が論じられたことがなかったのである。それは、次章で解放後に韓国の専門家たちが指摘する通りに、当時、歴史学や考古学という専門分野は日本人が中心になっているため、そのような問題提議が難しい状態であったためであろう。

3. 「文化財用語醇化」の動きと「^{ジルグルッ}질그릇」

それでは、いつから「^{ジルグルッ}질그릇」は専門用語として論じられるようになったのか。Naver News Libraryの新聞記事らからみれば、すくなくとも1970年代まで「^{ジルグルッ}질그릇」が歴史学や考古学の専門分野に関わる用語として使われた例は数少ない^[32]。一方、陶磁器分野の記事ではその用例が少なくないことが確認できる^[33]。

このような雰囲気が反映された結果か。1979年に文化広報部^[34]が刊行した『韓

[32] Naver News Libraryで1947年から1979年の間、「질그릇（ジルグルッ）」を検索すると、『朝鮮日報』『東亜日報』『毎日経済』『京郷新聞』に合せて221件の記事が出てくる。しかし、その中で、「질그릇（ジルグルッ）」が歴史学や考古学の専門用語として登場するのは5件位である。「慶州文化財의今昔 (2) 金鰲山」『東亜日報』1961.11.05；「検証알고封土」『朝鮮日報』1968.11.21；「高麗葬때 쓴 노릇발걸」『京郷新聞』1968.4.3；「大邱 高麗磁器등發掘」『東亜日報』1970.3.11；「韓國의 陶窯址보고 큰공부」『朝鮮日報』1970.4.14。

[33] 「陶磁器바자會」『東亜日報』1961.12.18；「實用・家内副業을 兼한내손으로 만드는 질그릇（ジルグルッ）」『朝鮮日報』1963.11.30；「國寶級美術品密輸出을企圖」『朝鮮日報』1966.3.18；「첫陶藝展을 연 金碩煥 여사」『朝鮮日報』1967.11.19；「밀고먼 完熟에의 길 현대陶藝展」『東亜日報』1970.8.31；「国宝순례⑩ 高麗靑瓷「고요의 美」 담긴 뛰어난 線과色……産地는 全南北」『朝鮮日報』1971.10.22；「韓國의 再発見國寶・寶物을 찾아 <2> 陶磁器篇—(5)」『京郷新聞』1973.10.30；「頂上에 도전하는靑少年들 ④ 陶瓷器細工 朴大鉉・劉永昌君」『朝鮮日報』1976.1.29；「李朝「노란색 찻잔」再現 慶南梁山도예가 申正熙씨」『東亜日報』1978.10.23；「家業 그脈을 찾아 ②「古水 자기」의 固守현장 窯業」『朝鮮日報』1979.1.26；「神秘의 傳統도예 再現 名匠 申正熙의 작품 세계」『朝鮮日報』1979.6.13など。

[34] 現在の文化体育觀光部の前身。文化・芸術・世論調査・言論・宣伝及び報道に関する事務に携わった中央行政機関。大韓民国政府樹立時、國務總理の直屬機關として設置された広報処が、1955年に大統領直屬機關である広報室に改編、1961年になっては広報行政の中央部署として広報部が発足したが、文化広報部の前史である。そして、1968年、文化広報部になり、それまで文教部で携わっていた文化財管理局と博物館を含む文化芸術業務を移管された。『한국민족문화대백과』「문화공보부」(<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/SearchNavi?keyword=%EB%AC%B8%ED%99%94%EA%B3%B5%EB%B3%B4%EB%B6%80&ridx=0&tot=17>, 2021.11.23閲覧)。

英文化財用語集(A Glossary of Korean Arts & Archeology(Korean-English))^[35]では、「ジル グルッ질그릇」が「陶磁器」部分の用語として提示されている。この用語集は、「建築」「考古学」「工芸」「陶磁器」「彫刻」「絵画」の6つの分野に分かれ、各分野の用語を英語で対訳したものと、用語に対する韓国語説明とその英語訳が一つのセットになっている。ここで、「ジル グルッ질그릇」の英語対訳は「Unglazed earthenware, biscuit ware」となっていて、韓国語説明には「泥土のみで焼いて作り、上薬を塗ってない器」と述べられている^[36]。一方、「考古学」の部分には「土器」がなく、「土器片」と「陶器」が載っている^[37]。このように、「ジル グルッ질그릇」は1970年代には「陶磁器」の分野で、専門用語として吸収されつつあったことが読み取れる。

しかし、文化財用語の問題が本格的に台頭するのは1980年代からである。1982年10月5日、「良い我が言葉を使わずに外来語が横行 文化財用語」^[38]という記事が『朝鮮日報』に載る。この記事は、文化財の用語として主に外来語で表記されている当時の状況を批判し、「国語醇化推進委員会」が「国民的な克日運動」に相まって提議した「文化財用語のハングル化」を紹介する内容になっている。記事によるとこの委員会は先月30日の第51回定期月例朝食会に当時、文化広報部の文化財専門委員であった金基雄博士を招聘し、文化財用語の汚染経緯と実態について聞き、文化財用語の韓国化作業を促し、肯定的な反応を得たという。金教授は、この委員会で「文化財用語には字典を探してみないと読みづらい難しい古字が多い」ことを問題視し、その例として「支石墓」「土壙墓」「積石塚」などの墓地関係の用語や、「柱穴」「石斧」などの考古学における用語を取り上げた。また、このような難しい用語を分かりやすい「我が言葉」へ変えないといけないという主張には「異論」がないと述べている。そして、金教授は文化財用語のハングル化がうまく進んでいない理由として、この分野の研究が外国より遅く始まったことをあげて、特に「日帝が彼らの侵略政策の一つとして非専門家である人類・史学・建築学者を動員して、我らの古い墓を掘り返して、勝手に定義した文化財用語」は、そのまま使ってはいけないと強調したという。そして、記者は金教授が陶磁器の場合も日本式名称が主であることを指摘したことに対して、ハングルで表記できるものはハングルに変更しないといけないといい、その一例として、「질그릇(土器)」を挙げている。

[35] 『韓英文化財用語集(A Glossary of Korean Arts & Archeology(Korean-English))』(문화공보부, 1979)

[36] 同上、190頁。

[37] 同上、63頁。

[38] 「좋은 우리말 놔두고 外來語가 활개 文化財용어」『朝鮮日報』1982.10.5。

また、同年 10 月 11 日、延世大学校考古学科の孫寶基教授をインタビューした次のような記事が『京郷新聞』に掲載された^[39]。孫教授は「考古学・解剖学・印刷・出版等、彼の研究領域の用語はもちろん、一般用語に至るまで目に入る外国語はほぼ全て我らの言葉と文章で書き直した」と、自分の作業を説明した。その後、このような作業が必要であると考えたのは 1940 年代からで、その理由は、「漢文や日本語では我らの感情や思想を確実に表現できない上、実感できない」からだと言った。そして、専門用語醇化作業の意義を「我が言葉と文章を見つけることで民族の根を見つけ、〔その根を一筆者註〕より深くおろすことができる」と強調した。

このような議論が浮上した理由は何であらうか。まず、同年 6 月から韓国で話題になったに日本の歴史教科書歪曲の問題があったと考えられる。これは、日本文部省が発表した翌年 4 月から小学校及び高等学校で使用する教科書の内容が問題になった出来事であった。詳しくは、第二次世界大戦後に「朝鮮は日本の 35 年にわたる支配から解放され」と述べられた教科書の原稿を、「日本は台湾南部・サハリン・朝鮮などに対する支配を拒否され」て領土が減ったと修正し、韓国においては韓国の解放という意義が削除されたということで、日本政府に対する反発が引き起こった出来事である。また、「侵略」は「進攻」に、「苛政」を「圧政」に、「出兵」を「派遣」に修正するなど、表現を緩めたこと^[40]に対して、韓国のみならず中国、ソ連などの怒りが沸騰した^[41]。この問題は新聞の一面を飾るほど^[42]、韓国では大きく報道され、韓国政府が日本へは正を要求することになる^[43]。その中で、当然、日本語用語の根を絶とうとする運動とかも活発になる^[44]。

[39] 「우리말찾기 40 餘年 손보기교수 “우리말·글 살아야 우리얼 산다”」『京郷新聞』1982.10.11.

[40] 「日 새교과서, 2 次大戦을 정당화 韓國 지배권등 모욕적 표현 中共, 歴史 왜곡 비난」『朝鮮日報』1982.6.29; 「日本 개편 高校 교과서 “侵略 역사 美化”」『東亞日報』1982.7.7; 「日本 개편 教科書를 보고」『東亞日報』1982.7.8; 「日本 高校 교과서 檢定 말쑥 “侵略 역사 美化” 中共도 批判」『東亞日報』1982.7.9; 「日 교과서 檢定 말쑥 蘇도 “歴史 왜곡” 非難」『東亞日報』1982.7.15; 「한마디 日本의 歴史 歪曲은 軍國主義의 産物」『京郷新聞』1982.7.19; 「高校 교과서 侵略史 美化 日國內서도 거센 反撥」『京郷新聞』1982.7.22; 「日帝, “平和의 假面” 을 벗었다」『朝鮮日報』1982.7.24 など.

[41] 「日本人 출입禁止」표지 歴史 왜곡에 화난 食堂 주인」『每日經濟』1982.7.27; 「“韓國 멸치는 日本 “官” 이 主導」『東亞日報』1982.7.27; 「釜山 日영사관에 投石」『東亞日報』1982.7.30; 「홍콩 大學生들 왜곡抗議시위」『朝鮮日報』1982.8.7; 「中共 계속 日명비난 言論 兇악 蠻行특집」『朝鮮日報』1982.8.7; 「홍콩 反日운동 擴大」『東亞日報』1982.8.14.

[42] 「高校 교과서 侵略史 미화 日서도 對外 관계 沮害 우려」『東亞日報』1982.7.21.

[43] 「文教部서 책入手 政府, 日 교과서 是正 요구키로」『東亞日報』1982.7.22; 「日 教科書 문제 國會 차원서」『每日經濟』1982.7.23; 「政府, 日에 真相 규명 公式 요구」『東亞日報』1982.7.27.

[44] 「일본말 用語 뿌리뽑자」『朝鮮日報』1982.8.28.

そして、文化財用語醇化に対する関心が高まった二つ目の理由は同年の12月15日の国会本会議で修正・通過された「文化財保護法」の改正と、その審議過程において「文化財用語を専門的に研究し、合理的に体系化することを促した」^[45]ことが注目されたことであると考えられる。

このような社会情勢の中で、翌年2月には国立中央博物館付設の韓国古美術研究所から考古学用語をハングルに醇化した成果が新聞に報道される^[46]。この考古学用語のハングル醇化事業については、当時、国立晋州博物館長であり、この事業に始終実務担当者として参加したハン・ヨンヒ氏がこの事業の過程・意義について述べた論文^[47]から、その詳細を確認できる。この論文によると、事業が起動したのは1976年7月に国立中央博物館内に仮称「考古学・美術史用語改訂審議委員会」を設けて、その作業の方法と基本指針を決定するために第一回会議を開いたことからである。事業は国家予算ではなく、韓国文化芸術振興院からの支援金によるものであった^[48]。また、審議委員には考古美術分野のみならず国史学やハングル、漢文分野の有識者が含まれていた。その上、会議においては次のような五つの指針が決議された。

- 一、中堅学者たちを調査委員に委嘱して、細分化された分野別に現在使用される用語の収集作業を実施し、その資料に基づいて個別審議する。
- 二、外来語はそれに値するハングルを探して、我が言葉化することを原則にするが、技術的な過程に使われる用語は職人など、伝統的職業に従事する人と接して固有の我が言葉を見つけることにする。
- 三、難しい言葉は分かりやすい言葉を探して、使用することとするが、水準が低すぎる、もしくは低俗な言葉は避けて、大衆が理解するに無理のないようにする。
- 四、一つの概念を持つ対象の用語として、複数の用語が乱立しているものは、まずは分類して重複を避け、単一のものにする。
- 五、新造語は原則的に作らないこととするが、万が一必要である場合、その

[45] 特に考古学用語における英語・日本式漢字語など用語のばらつきが問題として取り上げられている。「『動産문화재 등록』이 核心-國會 통과된 文化財保護法 개정 내용」『東亜日報』1982.12.18。

[46] 「考古学用語 우리말로 고쳤다」『京郷新聞』1983.2.4；「考古学용어日式탈피 우리말로 쉽게 풀이 7百 20항 확정」『東亜日報』1983.2.7；「考古学용어 우리말로 바꿔 7백 23개……年内적으로 발간」『朝鮮日報』1983.2.8。

[47] 한영희 「고고학 용어의 말바꾸기 작업」『배달말』10 (배달말학회, 1985)。

[48] 同上、14頁。

数を減らすこととする^[49]。

このような指針に従って、各分野の専門家に一カ月間の資料収集を依頼したが、資料収集に予想外の時間がかかり、審議委員に渡した「考古学・美術史用語審議資料集」が完成できたのは、3年後の1979年12月であったという^[50]。また、この資料に基づいて開催した審議委員会では英語・漢文・日本語の用語について方針が決定された。ここで、英語は「専門書籍で使われるものを並行して使うことにするが、結局は我が言葉で変えて使う」ことに、また、漢文は「直すことにするが学術的にいいものはそのまま使用して無理がない」ようにすること、日本語用語は「原則的に排除する」こととなった^[51]。

しかし、この事業は81年に韓国文化芸術振興院からの支援金が途絶えてしまい、1年半の間、停滞することになる。論文によると、「翌年作業推進者らの根強い支援要請と韓国文化芸術振興院の配慮」によって再び支援金を貰うことが出来て、事業が再開されたという^[52]。上述したような出来事と、社会情勢も支援金が再配布された一要因であったと考えられる。ともあれ、再開された事業の成果物は82年末に選定された用語を審議委員会が審議し、合わせて724項目を確定した^[53]。これを整理し、図面を入れる作業までおわり、『韓国考古学改正用語集』（以下、改正用語集）として発刊できたのは1984年の3月であった^[54]。

この『改正用語集』のはしがき^[55]によると、この事業は、韓国の考古学は「草創期から数十年は日帝の支配下で、専ら日本人学者らによって遺跡発掘調査が行われた」ため、「自然に彼らの影の下で成熟」され、その後、結構な時間が経ったにもかかわらず、考古学の隅々には多くの外来語、特に「日本語のかす」が残っている実情であることに対する問題意識からはじまった。そして、ここの用語がすべて完璧なものとは考えない上、よりふさわしい用語があれば変更するのは当然であるが、「一日も早く統一された用語が定着し、この分野学問に新しい活力と気運」が訪れることを期待すると述べられている。

[49] 同上、7頁。

[50] 同上、8頁。

[51] 同上、9頁。

[52] 同上、10頁。

[53] 同上、10～11頁。

[54] 同上、11頁。

[55] 한국고고미술연구소編『한국고고학개정용어집』（한국고고미술연구, 1984）

ここで、土器は漢字を韓国語で発音した表記である「토기」となっていて、「土で作って焼いたすべての器」と説明されている^[56]。一方、「陶器」の項目は存在しない。ところが、ここで「ジル グルッ질그릇」は「胎土」の部分に「ジル グルッ질그릇の原料になる土」^[57]という説明として登場する。すなわち、ここで「ジル グルッ질그릇」は「胎土」で作られたすべての器を総称している。以上を総合すると、「ジル グルッ질그릇」は前掲した<図1>より広い範囲の用語として使われたが、それ自体は定義していないことは、「ジル グルッ질그릇」を考古学用語として考慮していないためであったと考えられる。しかし、「ジル グルッ질그릇」が「胎土」で作られるすべての器を意味する以上、「土器」は「ジル グルッ질그릇」の同位言葉になる。

4. 『文化財用語醇化案』と「ジル グルッ질그릇」

以上のような『改正用語集』を刊行し、専門家や関係機関に配布しても、用語の統一はできなかったためか、1980年代から90年代を通じて、考古学及び文化財用語を分かりやすくハングル化することと統一することの必要を論じる記事が新聞で散見される^[58]。また、学者^[59]や政府側がこのような動きに踏み出した姿も時々あらわれる^[60]。特に1993年、新しく文化財管理局長に赴任した鄭徳容氏とのインタビュー記事^[61]には文化財用語と考古学用語の関係が読み取れる。ここで、鄭は、文化財を生活の中に引き込ませる政策として、「まずは文化財関連用語を親しい日常語に変えて、それを考古学用語辞典として刊行し、文化財の生活化作業を始める」つもりであると語っていた。

このような、社会と学会の用語醇化に対する期待がある中で、1999年には文化

[56] 同上、80頁。

[57] 同上、45頁。

[58] 韓永熙「日本式 고고학用語」『朝鮮日報』1987.4.15；「박물관전시품 우리말표기 늘고있다」『毎日経済』1991.3.6；「문화재 안내문用語 알기쉽게 쓰자」『東亜日報』1993.10.9；「새 문화재관리국장 鄭徳容씨」『생활속의 문화재』 최대 역점 『京郷新聞』1993.3.18；「보기따라 달라지는게」『문화재』30～40대 박사급 학자주축 답사모임 국학연구소 『京郷新聞』1997.9.10；「박물관 문화재 안내문 쉬웠으면」『東亜日報』1999.3.29；「우리 문화재, 우리가 조금만 더 사랑합시다!」『京郷新聞』1999.11.29；「유적지 안내문 쉽게 써주기」『東亜日報』1999.12.14。

[59] 「「한국舊石器學연구의 김잡이」 펴낸 孫寶基박사」『東亜日報』1988.5.3；「한국도자사연구」『朝鮮日報』1993.10.9；「「國史교과서 미술史 다시 써야」」『朝鮮日報』1994.5.31；「「『한영한사전』 펴낸 성낙진 교수 경주문화재 한글·영어로 쉽게 해설」『京郷新聞』1998.10.15。

[60] 「문화재 안내판 이해쉽게 재정비」『한ギョレ』1997.1.8；「고문헌같은 문화유적 안내판」『한ギョレ』1997.1.1；「문화재 안내판 이해쉽게 재정비」『毎日経済』1999.9.4。

[61] 「새 문화재관리국장 鄭徳容씨 “생활속의 문화재” 최대 역점」『京郷新聞』1993.3.18。

財庁から『文化財用語醇化案』^[62]（以下、『醇化案』と表記）が刊行される。この『醇化案』の「基本方針」から見ると、この事業は「1999年に施行した＜文化財用語醇化事業学術用役＞を委任された」^[63]ものである。その上、この事業の方針としては、「既存の文化財用語が概ね漢字造語であったものが多いため、ハングルで表記した時に意味の伝達が不可能であるものが多い故、これをハングル化する作業」であり、また、「北朝鮮の文化財用語がすでに大韓民国のそれと差異が大きいところ、それに対する望ましい統一案を提示する」ことが挙げられている^[64]。そして、『醇化案』作成の基本方針を次のように伝えている。

- 1) 現在文化財関係学会の研究・活動実情に鑑みると、用語醇化統一案を提示することはとても急を要するもので、重要ではあるが、その作業量が大変難しく、膨大であるため、相当な時間を要する仕事であり、それゆえ、ここではこれに対する本格的な議論のための基礎資料を提示する水準の試案を用意することにする。
- 2) 我が文化財用語はほぼ日帝時代に作られ、用いてきたため、日本式口振りが残っているものが少なくないが、それを可能な限り、全て変えることにする。
- 3) 文化財用語はハングル化することが時流に適すると判断し、可能な限りハングル化の立場を堅持することにする。しかし、無理にハングル用語に作りだすことは避け、既存のハングル用語のうち、意味伝達上、問題があるものは漢字語に還元させることとする。
- 4) 漢字用語はハングル用語へ変換する過程で当分の間、併用の方が良いと考えられる場合とハングル用語と漢字用語が長い間併用されたため、一方を選択すると用語上、むしろ混乱が起こるかもしれない場合は、併用案として提示することとする。（例：ゴインドル、支石墓）
- 5) 完全に専門家の間で使用される微細な専門用語はわざと無理に醇化案を提示しないこととする。
- 6) 国語学、言語学、漢文学上言語の一般原理に照らして既存用語の中で語法上無理があれば、醇化案として提示する。

[62] 문화재청 『문화재용어 순화안』 (문화재청, 1999)。

[63] 同上、5頁。

[64] 同上。

ここにおいては、「日本式口振り」が残っている用語は可能な限り全部変更するが、漢字用語は「当分の間、併用」するか、もしくはハングル化がむしろ混乱を呼び起こすと考えられる場合は、「併用」することを指針としている。また、「無理にハングル用語を作りだすことは避け」という部分は、前掲の『改正用語集』が新しいハングル用語は作らない方針としたことと同じである。要するに、ハングル化を目指す、その実用がすでに普及されている用語や、既存のハングルの言葉に合致するものがない場合は、漢字語のままにするということである。

この『醇化案』の特徴は、前掲した通りに「北朝鮮の文化財用語」の統一までを視野にいれているところであると考えられる。それは、嶺南大学校の考古学教授であり、当時『醇化案』事業に研究員として参加した李清圭氏が、当該事業のうち、考古学用語部分の方針と用語醇化の意義を述べた「考古学用語醇化案の基本方向」からも確認できる。ここに、用語醇化における基本方向は「ハングル化の志向、北朝鮮用語の積極的検討、そして、常用された漢字語の受容」^[65]であったと述べられている。ところが、「北朝鮮で純ハングル式表現に変えた用語があるが、それに対応した用語が韓国学界では漢字式の場合、北朝鮮式表現を積極的に受け入れる必要があると考えられる」と言いながら、その北朝鮮のハングル表現が「それほど不自然ではないが、我々にとって漢字用語がより慣れている場合」^[66]、漢字用語を採択することになっている。

一方、兪弘濬氏は『醇化案』のうち、「美術史」における醇化事業の必要性を述べた「陶磁器の用語統一（案）」で、「韓国の文化財用語の中で最も混乱を起こしているのは陶磁器分野である」と指摘し、その理由を「学術的考慮と検討から出たものではなく、日本植民地時代以来、慣行的に呼ばれたものを無意識的に使用した」ことによると判断している。続いて、その代表的な事例として「土器」と「陶器」の混乱を取り上げ、我々が現在「민무늬토기〔無文土器〕」と呼んでいるものと「新羅土器」と呼んでいる二つの「土器」は「その製作方式と質が全く異なるにも関わらず、同じ「土器」と分類していることを問題視している」^[67]。そして、「磁器」と「瓷器」の併用問題や、「沙器」と「砂器」を概念の区分なしで使っていることなどを問題として取り上げ、これらについて「必ず統一」しなければならないと主張している^[68]。

[65] 同上、11頁。

[66] 同上、12頁。

[67] 同上、19頁。

[68] 同上。

その後、まず「土器と陶器」という項目を設けて、土器と陶器をどのように定義すべきかを語っている。ここで兪氏は、まず、「器に釉薬が塗られていない器には土器と陶器があるが、これをハングルではすべて^{ジルグルッ}질그릇と呼んでいる」と明記している^[69]。そして、「^{ジルグルッ}질그릇のうち、土器は赤褐色を帯びて軟質であり、露天において700℃程度で焼かれたもの」であると述べ、陶器は「灰黒色を帯びて硬質であり、窯において1000℃以上で焼かれたもの」と定義した^[70]。それ故、「민무늬토기〔無文土器〕」は「土器」であるが、伽耶や新羅、すなわち、三国時代の「^{ジルグルッ}질그릇」は「陶器」であると述べている。その上、「新羅土器、伽耶土器」という用語は、「日本植民地時代に日本人学者が日本の陶磁史に照らし合わせた名称で、それに無意識的に従ったために生じた間違いに過ぎない」と、文化財用語における日本語の残滓を批判している^[71]。その後、「粉青沙器と粉青磁」という項目を設けて、「磁器」と「沙器」という用語の問題点を説明して、《図2》を提示している。

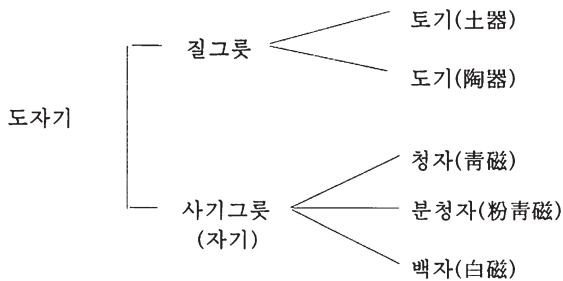


図2 『文化財用語醇化案』中「陶磁器の用語統一（案）」21頁の図

ところが、この『醇化案』の本文は、「考古学」「民俗学」「建築史」「美術史」の分野に分けて、各分野の専門用語醇化案を提示している。また、その形式は一行に「NO.」「分野」「醇化案」「ハングル」「漢字」「^{ジルグルッ}北朝鮮」「英文表記」「用語解説」の項目順に記入するシート式である。ここで、「^{ジルグルッ}질그릇」は固有用語ではなく、「土器」の「ハングル」「北朝鮮」の項目に入っていて、その「醇化案」としては「토기」が提示されている^[72]。また、『改正用語集』とは異なって、「胎土」の

[69] 同上。

[70] 同上、20頁。

[71] 同上。

[72] 同上、53頁。

説明は「土器を作るための原料になる土」となっている^[73]。その上、「土器」と「胎土」は「考古学」の分野に分類されている。一方、「美術史」の方では「土器」「陶器」^{ジル グ ルッ}「질그릇」について定義していない。以上を総合すれば、「질그릇」^{ジル グ ルッ}は「土器」と「陶器」を含む上位概念に位置付けられる同時に、「土器」を醇化するまへの「ハングル」「北朝鮮」の用語として片付けられたことがうかがえる。

おわりに？

以上は、「질그릇」^{ジル グ ルッ}という言葉を通じて、文化財用語というものが韓国において、どう認識されていて、いかに変化されてきたのかを探る試みであった。すなわち、文化財用語として純粋なハングル言葉を使うようになった理由と過程を、新聞記事と用語集の刊行を通じて検討した。その結果、次のようなことを確認できた。まず、ハングル言葉である「질그릇」^{ジル グ ルッ}は植民地時代には専門用語として認識されていなかったが、1936年には朝鮮語の「標準語」として、「土器」の「近似語」に位置づけようとする動きがあった。また、そのことから少なくとも「標準語」を査定した委員たちにとっては「질그릇」^{ジル グ ルッ}が「土器」の「近似語」として認識されていたと言えるだろう。

解放後、「질그릇」^{ジル グ ルッ}は徐々に陶磁器分野に関する記事で専門用語として使用されはじめ、これは1979年に出版された『韓英文化財用語集』からも確認できる。1980年代には、日本の歴史教科書歪曲問題や文化財保護法改正などと相まって、考古学など文化財と深く関連のある分野の用語をハングル醇化しようとする意識が高まる。その中で1976年から国立中央博物館付設の韓国古美術研究所が行っていた考古学用語改定事業の成果物が1984年、ようやく刊行できる。この事業は日本式漢字語を多くハングル化した意義があるが、ここで「土器」は「토기」と、ハングル表記になった。ところが、この事業で「질그릇」^{ジル グ ルッ}は、一つの個別用語としては提示されず、「胎土」の解説に「胎土」で作られるすべての器を総称するものとして記載された。

そして、90年代にも文化財や考古学用語のハングル醇化への要請が途絶えずに続く。そのため、個人研究者や政府側による、純ハングル用語を使用した論著の出版や文化財案内板の整備など、文化財用語の整備と定着を目的としたさまざまな試みがあった。その中、1999年には文化財庁から『文化財用語醇化案』が発刊

[73] 同上、41頁。

された。この『醇化案』は「日本式口振り」が残っている用語を「できる限り全部変更」という方針で作成された。ここで「^{ジルグ ルツ}질그릇」は、「美術史」分野の陶磁器関係用語の中で〈図1〉の位置、すなわち、「陶磁器」の下で、「磁器」と対等で、「土器」と「陶器」を含める用語として位置づけられる。しかし、「陶磁器」の部分において「^{ジルグ ルツ}질그릇」が提議されることはなく、また、「胎土」の説明は「土器を作るための原料になる土」になっている。そのため、実際に文化財用語としては浮いているように考えざるを得ない。要するに、「考古学」と「陶磁器」の分野の用語が相容れず、別々に成立しているように見える上、他分野用語との位置が明確ではないため、文化財用語としていかに使えばいいのかが見て取れない。そして、これは「^{ジルグ ルツ}질그릇」だけが抱えている問題ではなく、文化財用語自体が含んでいる問題であろう。そもそも各分野の専門用語を別々に表示することによって、分野の間に共有している用語の定義やその用例が浮いているのである。

そして、2003年には文化財庁から「分かりやすく改めた文化財用語資料集」が行政資料として配布された^[74]。すなわち、このような文化財用語の醇化及び整備事業は近年も続いていて、改定に改定を重ねていることが分かる。この「資料集」にも「^{ジルグ ルツ}질그릇」は用語としては提示されてないものの、「考古学」の「胎土」の「用語解説」で登場する。ここでは「土器を作る際に原料になる土」^{ジルグ ルツ}질그릇や陶磁器の下地になる土」と述べられている。ここから、1984年の『用語集』と1999年『醇化案』の解説を両方とも受け入れ、「土器」^{ジルグ ルツ}질그릇や陶磁器を並列することによって、「土器」と「^{ジルグ ルツ}질그릇」、「陶磁器」の関係が全く見て取れず、全て等価の言葉のように表記されている。翻訳する際に、ある言葉を対象言語の対訳に使うためにはその言葉を理解し、また、その言葉の位置を確認しなければならない。例えば、ある文化財に関わる解説や題目を翻訳するためには、その文化財に関する情報、原文の各専門用語が意味することを的確に理解し、また、対訳語として用いようとする言葉の意味と、それが専門用語として使用してもいい「位置」のものかどうか問題になる。もちろん、専門家向けの翻訳か、一般向けの翻訳か、または子供向けの翻訳かなどによって、使用する対訳語には少しずつ差が生じる。その意味で、「^{ジルグ ルツ}질그릇」は「土器」や「陶器」の一つの等価語として、一般向けの文化財解説をする際に韓国語使用者の読み手により親しく感じられ、韓国語の味を活かせる言葉として使用できると考えられる。ところが、今の状態では、

[74] 「쉽게 고친 문화재용어자료집」(https://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do;jsessionid=1aVZNyiejZJKev3Bmp2IYUi7NpiLMmy9NIyo8TeNZspamXBm0BCZmkETJKxIqfWZ.new-was_servlet_engine1?nttId=2964&bbsId=BBSMSTR_1045, 2021.12.01 閲覧)。

この用語が専門用語としては成立すると考えにくい上、そもそも専門用語との関係が曖昧であるため、専門家向けの翻訳には使うことはできない。すなわち、「^{ジル}질그릇」を専門用語として使うためには、より鮮明な定義と位置づけが必要になる。そして、「^{ジル}질그릇」のみならず、「土器」や「陶器」、「磁器」などの用語を分野別で論じるのではなく、「文化財用語」としてどう位置付ければいいのかを決定することが必要であると考えられる。

一方、本稿においては、北朝鮮の文化財用語と韓国の文化財用語との影響関係についてはほとんど触れることが出来なかった。前述した通りに、北朝鮮においては、「^{ジル}질그릇」は考古学論文などで確認できる専門用語であり、1999年の『醇化案』は「北朝鮮の文化財用語がすでに大韓民国のそれと差異が大きいところ、それに対する望ましい統一案を提示する」という方針のもとで作成されたものである。要するに、「北朝鮮の文化財用語がすでに大韓民国のそれと差異が大きい」という部分から、1990年代に韓国の専門家たちが北朝鮮の文化財用語と接することができる何らかの交流があっただろうという推測ができる。紙面の都合上、この推測については、別稿で論じたい。

参考文献

- 박현주 「도자기 분야 분류 체계 및 기본 용어의 번역에 관한 고찰」 『번역학연구』 20-1 (한국번역학회, 2019)
 박현주 「문화재용어사전의 구축 현황 및 번역보조도구로서의 활용성에 관한 제언」 『번역학연구』 15-2 (한국번역학회, 2014)
 한영희 「고고학 용어의 말바꾸기 작업」 『배달말』 10 (배달말학회, 1985)
 최경봉 「쟁점: 일제강점기 조선어학회 활동의 역사적 의미—『해방 전후사의 재인식』에 나타난 인식 태도를 비판하며—」 『민족문화사연구』 (민족문화사학회・민족문화사연구소, 2006)
 김석득 「근・현대의 국어(학) 정신사—국어연구학회에서 조선어학회 수난까지, 그 역사적 의미—」 『한글』 272(한글학회, 2006).
 박용규 『식민지시기 언론과 언론인』 (소명출판, 2015)
 『한영문화재용어집 (A Glossary of Korean Arts & Archeology(Korean-English))』 (문화공보부, 1979)
 문화재청 『문화재용어 순화안』 (문화재청, 1999)
 사회과학원 고고학연구소편 『조선 고고학개요』 (새날, 1989)
 한국고고미술연구소編 『한국고고학개정용어집』 (한국고고미술연구, 1984)
 문화재청 『쉽게 고친 문화재용어 자료집』 (문화재청, 2003)
 한창균 『북한 고고학 미술사 용어집』 (백산자료집, 1996)
 『韓國民族文化大百科事典』 <http://encykorea.aks.ac.kr/>
 『標準國語大辭典』 <https://stdict.korean.go.kr/>

『東亜日報』 『朝鮮日報』 『京郷新聞』 『毎日経済』 『ハンギョレ』